雲仙岳の火山活動に関するコメントと統一見解

平成3年5月17日
気　　象　　庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会会長コメント

昨年11月17日の噴火以来，各機関では地震，地殻変動，地磁気，地熱等の観測を強化し，また噴出物の調査を続けてきた。

本年2月の再噴火後，噴火活動が活発化し，さらに5月13日頃からは，これまで観測されていなかった活動火口直下の極めて浅い地震と火山生微動が頻発するようになってきた。さらに，地殻変動や地磁気の変化なども観測されている。これらの現象は火山活動の活発化を示しており，マグマが浅い所まで上昇していると推定される。

溶岩流出等を含め，今後の火山活動については警戒が必要であり，今後も引き続き厳重な監視を続ける。

平成3年5月26日
気　　象　　庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会会長コメント

本日11持すぎ頃から数回発生した火砕流は，水無川上流部に沿って約2.5km流下し，その先端は人家の近くに達している。また，一連の噴火に伴って，普賢岳北方にかなりの降灰があった。

火山活動は依然として活発で，今後とも火砕流・土石流が発生すると思われるので，厳重に警戒する必要がある。

平成３年５月31日
気　　象　　庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会の統一見解

雲仙岳は昨年11月九十九島・地獄跡両火口から噴火した後，本年２月には屏風岩火口からも噴火し，３月下旬からは活発な噴煙活動が始まり多量の火山灰を南東山麓に降らした。５月13日頃から，山頂部のごく浅い地震と微動が増加するとともに山頂部の膨張を示す地殻変動も明瞭になり，山頂部の消磁を示す地磁気変化も観測された。５月20日には，地獄跡火口に溶岩の出現が確認され，23日には火口東縁から部分的な崩落が始まった。さらに24日には火砕流が発生して水無川源流部に流下し，その後現在に至るまで，火砕流は頻繁に発生を繰返しており，堆積物の先端は火口から約３kmに達している。また，火口より北東から南東方向にかけてかなりの降灰があった。今回噴出してきたマグマはデイサイト質で粘性が高く，その化学組成は新焼溶岩に類似している。地震・地殻変動等の観測によれば，マグマの活動は依然として続いていると考えられる。

以上のことから，今後も引き続き噴火活動が続き，溶岩の噴出，火砕流，土石流の発生が続くと思われるので厳重な警戒が必要である。

平成３年６月12日
気　　象　　庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会会長コメント（現地発表）

雲仙岳では，６月に入っても火砕流が多発し，特に６月８日19時51分の火砕流は国道57号線に達する大きなものであった。

６月11日の観察によれば，８日以前にあった地獄跡火口の西の溶岩ドーム及び東斜面の溶岩ドームの大半が失われ，東斜面には新たな溶岩ドームが成長していることが確認された。

６月11日23時59分，従来の火砕流震動とは異なる波形の震動と空震が記録された。また，火口の北東方向に軽石が降下し，島原市北部で最大長径10センチメートル程度のものが見られた。以上のことから，今回の噴火様式は従来のものと異なり，やや爆発性を帯びたものであったと考えられる。

今後は溶岩ドームの崩落を伴う火砕流に加えて軽石を噴出する噴火も繰り返される可能性があり，火山活動に厳重な警戒が必要である。

平成３年７月25日
気　　象　　庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会会長コメント

雲仙岳では，６月８日に大きな火砕流が発生して以来，これを超える規模の火砕流はなく，７月に入ってからは発生回数も少ない状態が続いており，日に10回程度の回数で推移している。また，噴石を伴う爆発的噴火は６月11日の後は発生していない。５月中旬から多発した火口直下の地震は５月末に減少し，６～７月は少ない状態が続いている。山頂部の地殻変動も６月中旬より目立った変化を示していない。しかし，溶岩ドームの体積と崩落量から推定されるマグマの供給量は７月に入っても従来同様１日30万㎥程度の率で継続しており，ドームの成長と溶岩の崩落による火砕流の発生が続いている。溶岩ドームは東側に長さ500ｍ以上に延びており，北東側にもせり出して崩落が始まっている。溶岩ドームの体積は過去最大の約600万㎥になっている。

このように，マグマの供給が衰えることなく続いており，火山活動は依然として活発な状況を呈している。今後も溶岩ドームからの崩落による火砕流の発生が続くと考えられるほか，累積している大量の溶岩が崩落して，さらに大きい規模の火砕流が発生する可能性も残されている。

以上のことから今後も引き続き，火山活動に対する厳重な警戒が必要である。なお，大雨による土石流にも警戒が必要である。

平成３年８月28日
気　　象　　庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会会長コメント

雲仙岳では，８月に入って地獄跡火口東斜面での溶岩のせり出しが鈍化し，火砕流の発生が減少した。８月中旬に地震，微動が増加し，従来の溶岩ドームの西側で新たに溶岩ドームの成長が始まった。新しい溶岩ドームは火口北東部から崩落を始め，８月25日からはやや規模の大きい火砕流がおしが谷を流下した。その到達距離は次第に延び，８月27日には火口から約３km に達した。

溶岩ドームは不安定な状態にあり，しかも溶岩の供給は依然として続いている。今後，規模の大きい火砕流の発生も考えられ，千本木方面への火砕流の影響が予想される。また，新ドーム及び従来のドームの崩落により，水無川方向への大きな火砕流発生の可能性もある。

以上のことから，今後も引き続き火山活動に対して厳重な警戒が必要である。

なお，大雨による土石流にも警戒が必要である。